

十勝の出品牛 W最優秀賞 ホクレン道枝肉共励会  
乳用雄肥育牛の部・加納三司さん（JA士幌町）  
交雑牛の部・太田充英さん（JA帯広かわにし）

2021年11月6日

ホクレンが主催する2021年度の北海道枝肉共励会（乳用雄肥育牛の部、交雑牛の部）が10月23日、帯広市内の道畜産公社十勝工場で開かれた。乳用雄肥育牛の部では、JA士幌町の加納三司さんの出品牛（枝肉重量527キロ、格付けB3）が、交雑牛の部では、JA帯広かわにしの太田充英さんの出品牛（枝肉重量534キロ、格付けA5）がそれぞれ最優秀賞に選ばれた。

全道から乳用雄肥育牛の部に46頭（すべて去勢）が、交雑牛の部に55頭（メス23頭、去勢32頭）が出品され、審査は、日本食肉格付協会北海道支所の大成昭支所長（審査委員長）ら4人が担当した。

加納さんは、昨年と同じグループの第2西上加納農場でも最優秀賞を受賞している。肉牛部門責任者の吉田祐樹さん（44）は「士幌牛というブランドが認められた」とし、「一つの牧場単位の大きな視点で牛を観察し、ストレスが無いようにしている。餌の設定・変更・調整も、牛の月齢に合わせた設計を心掛けている」と語った。大成審査委員長は「大きく見栄えのする枝肉。肉質ではロースの脂肪交雑も適度に見られ、肉の光沢、締まり、きめの各項目も良好な枝肉」と評する。

一方、太田さん（58）は、2018年北海道枝肉共励会（交雑牛の部）で最優秀賞を受賞。昨年は、国内最大の枝肉共励会「全国肉用牛枝肉共励会」で部門最高位の最優秀賞を受賞。優秀な牛の生産を続ける。今回の受賞について、太田さんは「ありがたい。牛を驚かせたり、ストレスをかけたりしない環境づくりは、前から心掛けている。これからも変わらずに、いい牛を育てたい」と話す。大成審査委員長は「BMS10と突出しており、光沢、締まり、きめ、脂肪の光沢と質ともに、素晴らしい枝肉」と評した。

今回の共励会は、新型コロナウイルス感染拡大防止のため、生産者枝肉展示、枝肉講評、褒賞授与式は行わなかった。

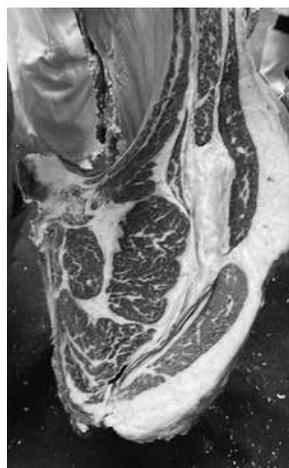
そのほかの入賞者は次の通り。（関係分、かつこ内はJA名）

【乳用雄肥育牛の部】

- ◇優秀賞1席＝鎌田佳尚・第2魁センター（士幌町）
- ◇優秀賞3席＝士幌北肉用牛牧場（同）

【交雑牛の部】

- ◇優秀賞2席＝太田充英（帯広市川西）
- ◇優秀賞3席＝林牧場（本別町）



乳用雄肥育牛の部・最優秀賞  
の加納三司さんの出品牛



交雑牛の部・最優秀賞を獲得した  
太田充英さんの出品牛

生乳供給過多 十勝酪農に波紋 苦渋の生産抑制へ  
牛減らし飼料も代え

2021年12月16日

年末年始に生乳が供給過多に陥り、処理不可能乳が大量に発生する恐れがある問題を受けて、全国有数の酪農地帯である十勝でも波紋が広がっている。十勝の酪農界は「危機感を持って、一致団結して生産抑制を進めていく」（十勝酪農畜産対策協議会・坂井正喜会長）と強調する一方で、消費拡大への協力も求めている。

「（年明け後の）通常の影響も覚悟した上で、協力を進めていかないと…」

内海ファーム（鹿追）の内海洋平さん（36）は生産抑制への協力についてこう語る。具体的には、乳を出す乳牛自体の数を減らすか、栄養価の高い飼料から低エネルギーの飼料に代えることで、乳量を調整していくことだ。

このうち、乳牛の数を減らすのは「乳の出が悪い乳牛を食肉用として出荷すること」（酪農関係者）。ただ、管内でも生産者が一斉に食肉処理場に“駆け込み”で持ち込むため、「処理場が渋滞し、順番待ちになる」（同）という。

また、低エネルギー飼料への転換は、乳牛自体の体調